



14

「袖」

日差しの感じが、もう夏に向かっている。

信号待ちをしているあいだ、感じる肌のあたたかさに、ちよつと前までは『あつたかいなあ』なんて目を細めていたのに、今じゃ『早く青になってくれ』と思っている。とはいえ、暑さレベルとしてはまだまだ。やわらかな湿気が包んでくれるあたり、優しい。

今のこの時期の空気は、春とか夏とかそんなはつきりとしたものじゃない。夏はいずれ来るけど、まだ来ない。

来てほしいような、来てほしくないような。なんとなく、そういう気持ちでゆれている。

同じ駅に向かうであろう、日に焼けた高校生たちが制服の袖をまくって歩いていた。誰かが何か言い、笑い声がひとつ跳ねて、そのまま駅前のコンビ二に消えていった。

僕もあの頃、あんな風に、理由もなく笑っていた気がする。でも実は苦悩もあった。周りからは『悩みなんてない』ように振る舞っていたけど。中身はわからないものなんだ。

なあ、君は大丈夫かい？ さっき笑ってなかったけどさ。

この前エスカレーターのことを書いたから、意識して階段を選び、登る。しかし、いざ登ってみるとこれが意外と長く、途中ですこし後悔した。軽く息を整えていると、さっきの高校生たちに追いつかれた。なんだ、アイス食ってら。

今の自分に目を向けると、夏が来るまでにやることが多すぎて不安だ。暑熱順化^{しよねつじゅんか}しなきゃ。すずしい布団を用意しなきゃ。梅雨を、こえなきゃ。

季節が移れば何かが変わる気がして、でも変わらないままいられるかもしれない。そんな、期待と、諦めにも似た受け入れの気持ち同居するグラデーシヨンのなかで、今年もまた、僕はあの夏の続きを生きてみる。

「まだ夏じゃない」という、ほんのわずかな余白。この始まりきらない時間が、何かチャンスをもらったみたいでけっこう好きなんだ。

反対ホームの知らない人の肩越しに、青空というよりは白っぽい空が広がり、夏の質感とはどこがちがう雲が泳いでいた。もうすぐ電車が来る。でもしばらく、その雲を目で追っていた。